

【研究ノート】

海保青陵「談五行」訳注稿（4）

坂本 頼之

【はじめに】

本稿は拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」（『国士館哲学』第十九号 平成二十七年三月）「海保青陵「談五行」訳注稿（2）」（『国士館哲学』第二十号 平成二十八年三月）「海保青陵「談五行」訳注稿（3）」（『国士館哲学』第二十一号 平成二十九年三月）に続き、江戸時代の漢学者海保青陵（1755～1817）の「談五行」の訳注を試みたものである。

「談五行」は滝本誠一氏編著『日本経済叢書』巻二十六（日本経済叢書刊行会 一九一六年七月（以下『叢書』と記述））に所収・刊行されたものが、同じ滝本誠一氏編著の『日本経済大典』第二十七巻（啓明社 一九二九年六月（以下『大典』と記述））に再録されており、また蔵並省自氏編『海保青陵全集』（八千代出版 一九七六年九月（以下『全集』と記述））にも収録されている。本稿では『叢書』所収の「談五行」を底本とし、『大典』『全集』を併せて参照した。いずれの「談五行」にも句読点と返り点が施されており、基本的にはそれに従って訓読している。「談五行」原文は一つの文章となっているが、本稿では内容により適宜区切っていくつかの文章に分けて番号をふり、【原文】【書き下し】【現代語訳】の順に記した。また【原文】の次に『叢書』『大典』『全集』の文に異同がある場合注をつけた。

青陵の語句の解釈は独特のものが多いため、訳注にあたっては青陵の著作を参考として解釈することに努めた。特に青陵の五行解釈がまとまった形で述べられている『洪範談』を、訳注を行う上で参考としている

（注1）。青陵の著作の引用の際には『全集』を用い、引用した箇所の変数を附した。青陵の著述は片仮名漢字交じり文が殆どだが、引用の際には参照の便宜上平仮名漢字交じり文に改めた。また引用された各経典、特に『書経』洪範を参照する際には『十三経注疏附校勘記』（中文出版社一九七九年）を用いている（注2）。

（注1） ただし前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」でも触れているように『洪範談』と「談五行」ではその解釈に異なる点も見られる。

（注2） 訳注を作成するにあたっての各資料の詳細については、前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」を参照していただきたい。

【原文（一）】

五福、寿一位、富一位、考終命一位。康寧与攸好徳、所以考終命也（注1）。康寧、寿之属。好徳、富之属。

（注1） 附されている返り点は『叢書』『全集』は書き下すと「終命を考する所以なり」となる一二三点、『大典』は「考終命する所以なり」となる二点である。しかし青陵の『洪範談』における「考終命」解釈「おいて命をおはる」（『洪範談』『全集』p.681）に従えば、『叢書』『大典』『全集』の返り点では合わない。

【書き下し（一）】

五福、寿一位、富一位、考終命一位なり。康寧と攸好徳とは、考ひて命を終わる所以なり。康寧、寿の属なり。好徳、富の属なり。

【現代語訳（一）】

(前稿より青陵の言葉の続き)『洪範』の「五福」のうち(注1)、「寿」(注2)が一つの位、「富」(注3)が一つの位、「考終命」(注4)が一つの位である。「康寧」(注5)と、「攸好徳」(注6)とは、年老いて最期を迎えるためのものである。「康寧」は「寿」に属するものである。「好徳」は「富」に属するものである(注7)(そのため「五福」もまた「寿」と「富」と「考終命」で三の数となっているのである)。

(注1) 『書経』洪範の「嚮用五福」「五福。一曰壽、二曰富、三曰康寧、四曰攸好徳、五曰考終命」に関する青陵の解説が述べられている部分である。「五福」の「福」とは「福は示に従ふ。示は即祇字なり。神祇なり。神事なり。ゆへに凡そ天の事、神の事、祭の事、皆示に従ふ。目出度事なり。畱は福なり。逼なり。せまるなり。せまるとは高くあがりて、とんとの上までつきせまる事なり。目出度事のとなとの頂上といふ字なり。ゆへにさいわいと訓ず」(『洪範談』『全集』p. 604)「福はさいわいと訓ず。目出度なり。凡そ示に従ふものは、皆神祇の事に従ふ。天意といふほどの事なり。そこで祀りと祭と礼と、扱、禍と崇と、凡そ善悪の事にて、皆天より降るもの事は皆示に従ふなり。ゆへに福も天のひいきにあづかりたると云ふ事なり。扱、畱はせまると云ふ心の字なり。天のひいきを大きにかふむりて、ずつとすりよりて、極々せまりたるなり」(『洪範談』『全集』p. 681)と、青陵は字形の構造から字義を解説し「さいわい」と訓じている。ただし「さいわい」とはいえ、青陵の解説によれば「洪範はこころいきのみをいふ。早ふいへば、智恵の骨組なり。骨組とは骨ばかりにて、皮はてんでんに己が勝手の物を張りてつかふといふ事なり」(『洪範談』『全集』p. 604)であるから、「福にもいろいろあり。大わけにわくれば五つなり」「銭のもふけよふにもいろいろあり。大わけにわけて、五つにくばりつけて見るよふにする事、骨組へ我紙を張る稽古なり」(『洪範談』『全集』p. 605)と、現実世界の「福」へと応用される。また「福」は「天より降る(天から降される)」ものではあるが、「天

より授るは理に叶ひたるものゆへに、それだけには取れる福なり」（『洪範談』『全集』p. 633）であって、「理」にかなった「利」であり偶然や奇跡ではない。「理」にかなった「利」の獲得について、青陵は『前識談』で説いている。詳しくは拙稿「『前識談』の構造からみる海保青陵の思想」（『東洋学研究』四十七号 平成二十二年三月）を参照していただきたい。

（注2） 「寿」とは「寿は寿命の長きなり。寿の字は寿命の長きまでの字なり。寿命の長き男にもいろいろあり。乞食になりて長寿にても寿なり。永牢にて牢の中に入りて、人間づき合をする事もならひでも、長寿なれば寿なり。ゆへに寿は福の内の一つなり。かたかしぎなるものなり」（『洪範談』『全集』p. 681）と説かれているように、長寿ではあっても長寿であるだけで偏った「福」のこと。

（注3） 青陵は「富」について「宀は上に覆ひたるものの惣名なり。天にても天井にても何にもせよ、上にををひたる第一高き処にて、是より上には物はなしと云ふ心也。ゆへに字宀に作る。富は高の字の略にて、せまると訓ず。偏逼并にせまるなり。然れば富は上にせまる極めて高き所へ、迫近すると云字なり。後世の貴の字の義に当る」「貴（原文「臯+貝」（貴の異体字）筆者注）は金銭の窮らぬ尽せぬと云ふ字也。後世の富の字の義にあたる」（『富貴談』『全集』p. 522）と、『富貴談』で「富」と「貴」の字義が後世混同してしまっていると指摘しているが、『洪範談』においても「富貴談にもいへる如く」（『洪範談』『全集』p. 681）として「富」の字義について説明し「この段も富はとみたる事をいひたるや、たつとき事をいひたるや知らず」（同上）と述べる。

（注4） 「考終命」とは「考は老の事なり」（『洪範談』『全集』p. 681）であり、「おいて命をおはる」（同上）ことと青陵は解釈している。「おいて命をおはる」事がなぜ「福」であるかということ「年よりて安楽になりて、気にかかる事もなく、子孫相続して目出度死ぬる事なり」（同上）であるからである。

- (注5) 「康寧」とは「身のやすきなり」（『洪範談』『全集』p. 681）であり、「不自由なる事のなきのが康寧なり。病気のなきが康なり。貧でなきが寧なり」（同上、原文ママ）と「康」「寧」が解釈されている。
- (注6) 青陵によれば「攸好徳とは、智恵のある事なり。己れがこのむところは、天より賜はりたる直心をとりにて養ふ事がすきじや。これ知恵者なり」（『洪範談』『全集』p. 681-682）と解釈されている。この『洪範談』の説明からすると、青陵は「攸好徳」を「好む攸は徳なり」と読んでいるようであり、実際『全集』の『洪範談』の「攸好徳」の文には「好」字にレ点がついている。また『洪範談』の他の箇所でも「攸はところなり」（『洪範談』『全集』p. 589）と「攸」を「ところ」と訓じている箇所もある。しかし「談五行」では後文に「好徳、富の属なり」という文があり、そこでは「好徳」で語句を成しているところからすると、『洪範談』と「談五行」は異なる読みの可能性がある。また『洪範談』で「天より賜はりたる直心」が「徳」とされるのは、「徳の古字は恵の字なり。直心なり。天より賜はりたるままの心を恵といふ」（『洪範談』『全集』p. 600）ためである。
- (注7) 「談五行」では「康寧」は「寿」に属し、「攸好徳」は「富」に属すとされる。しかし『洪範談』では「康寧」は「病気のなきが康なり。貧でなきが寧なり。今日の富の字の場なり。福外にあり」（『洪範談』『全集』p. 681）とされ、むしろ「康寧」の方が「富」と関連づけられている。また「攸好徳」は「福内にあり」（『洪範談』『全集』p. 682）とされ、「康寧」は外の福、「攸好徳」は内の福として内外に対置されている。その上で「寿と富は、水と火とに配してあるなり」「土に配してよろしきは考終命なり」（共に『洪範談』『全集』p. 681）と、「寿」が水、「富」が火、「考終命」が土に配され、「きつと外内なり。外福は陽にして、内福は陰なり。きつとしたる水・火・陽・陰・土なり」と、「寿」「富」「康寧」「攸好徳」「考終命」をそれぞれ水・火・陽・陰・土に配しており、「寿」（その属「康寧」）・「富」（そ

の属「攸好徳）・「考終命」の三と捉える「談五行」と解釈が異なっている。

【原文(二)】

六極凶短折即刑死也。疾自外来者、憂自内出者、是三位也。貧^(注1)即憂之輕者、惡即凶短折之輕者、弱即疾之輕者。言人之死三。曰刑死。曰外疾。曰内病。是亦三数也。故曰、洪範之数皆三矣。

(注1) 「貧」は『全集』では「貪」となっている。『叢書』『大典』ともに「貧」であり、また『書経』洪範本文でも「貧」、『洪範談』でも「四曰、貧」(『全集』p.682)と「貧」である。このため『全集』の「談五行」は「貧」と「貪」の字形が近いいため誤ったものと考えられる。

【書き下し(二)】

六極、凶短折は即ち刑死なり。疾は外より来たる者、憂は内より出づる者、是れ三位なり。貧は即ち憂の軽き者、悪は即ち凶短折の軽き者、弱は即ち疾の軽き者なり。言は、人の死は三あり。曰く刑死、曰く外疾、曰く内病。是も亦た三の数なり。故に曰く、洪範の数は皆三なり、と。

【現代語訳(二)】

『洪範』の「六極」^(注1)のうち、「凶短折」とはつまり刑罰による死のことである^(注2)。「疾」とは身体の外が原因となった病死であり^(注3)、「憂」は心が原因となった病死であり^(注4)、この「凶短折」「疾」「憂」で三つの位である。「貧」^(注5)とはつまり「憂」の軽いものであり、「悪」^(注6)とはつまり「凶短折」の軽いものであり、「弱」^(注7)とはつまり「疾」の軽いものである。ここで言っていることの意味はつまり、人の死には三種あって、刑罰による死、身体の外からの病による死、心の内からの病による死(の三つ)であるということである^(注8)。「凶短折」「疾」「憂」

もまた三の数となっている（注9）。だから私は「洪範で説かれている数は全て三である」と言うのである」と。

（注1）『書経』洪範の「威用六極」「六極、一曰凶短折、二曰疾、三曰憂、四曰貧、五曰惡、六曰弱」についての解説が述べられている部分である。「六極」の「極」とは「極はきわまりと訓ず。つまりたるなり。つまりて先へすすまれぬ事なり。困窮なれば明日まではいきていられぬといふよふに、つまりたるを云ふなり。よき事のつまりも極といふ。つまると云ふ事ゆへなり」（『洪範談』『全集』p. 604）、「極は一体は屋根のむねのとなとの第一の高きところなり。ゆへに甚の字の所、窮の字の所に用ゆ。皆ごくごく甚しきつまりと云ふ事なり」（『洪範談』『全集』p. 682）とあり、「窮」であるが、ここに挙げられている六つの「極」は、死か「死におとらぬくるしみ」（『洪範談』『全集』p. 683）であり、「不仕合を大・小とわけて、大は死三通り、小はくるしみ三通り」（同上）と分けたものであって、これらは「皆不仕合なるなり」（同上）、つまり「不幸」である。そしてこれらは「天のこらしめ」「六極は天の罰なり。天の御仕置きなり」（『洪範談』『全集』p. 683）とされる。

（注2）「凶短折」について「談五行」では「凶短折即刑死也」と、「凶短折」三者を「刑罰による死」と一つにまとめて解釈しているが、『洪範談』では「凶・短・折は刃ものにて死ぬるなり。刑戮にても、賊にころさるるも、自身に死するも、皆凶・短・折なり。凶は不吉なり。目出度なきなり。短はわか死なり。折は中ごろにて死するなり」（『洪範談』『全集』p. 683）と、「刃物による死」とまとめた上で、「凶」「短」「折」をそれぞれ別個の死として説いており、「談五行」と異なっている。

（注3）「疾」とは「疾はやまひにて死するなり」（『洪範談』『全集』p. 683）とあるように、ここでは病気による死のこと。「外より来たる」とは「病にて死するは、邪氣にうたれて死するなり。邪氣は外より襲ひ来るものなり。ゆへに疾で死するは、死の字の

外より来れるなり」（『洪範談』『全集』p. 683）と、疾病が身体の外からの要因で発生することから、病気による死を「外から来る」と青陵は考えている。ここではそれに従って解釈した。

- (注4) 「憂」とは「憂はうき目にあふなり。心をいためる。くるしめるなり。心をいためて死するなり」（『洪範談』『全集』p. 683）とあるように、ここでは心労による死のこと。「内より出づる」とは「心労は内より出るものなり。ゆへに憂にて死するは、死の字内より出たるなり」（『洪範談』『全集』p. 683）と、心労が心から発生することから、心労による死を「内からわく」と青陵は考えている。ここではそれに従って解釈した。

- (注5) 「貧」とは『洪範談』では「貧は財貨のあつまらぬなり。ちりちりばらばらにちりてしまふて、あとが一向に足らぬ事になるなり」「貧はびんぼう性なり」（『洪範談』『全集』p. 683）と解釈されている。

- (注6) 「悪」とは『洪範談』では「悪は心こわくて、人の言を容るる事のならぬなり。じょうのこわきなり。見す見す人の言ふ事がよふて、己れの心がわるふても、どふも人の言にしたがわれぬと云ふ人なり」「悪はわるひ事を取る性なり」（『洪範談』『全集』p. 683）と解釈されている。

- (注7) 「弱」とは『洪範談』では「弱はもろしと訓ず。己れ一人立ておる事もならぬなり。おくびようなるなり。これはくやしい事じやと思ふて、歯がみをしても、どふもよわきなり。力らのなき人、多病の人、どふして見ても、人なみにいかぬは弱なり」「弱はよわい性なり」（『洪範談』『全集』p. 683）と解釈されている。

- (注8) 『洪範談』でも「人の死は如此三品なり。刃もので死ぬか、疾で死ぬか、憂で死ぬかなり。刃ものは第一に重し。内外の死は其つぎなり」（『洪範談』『全集』p. 683）とされる。ここではこれを参考に解釈した。ただし【現代語訳（二）】（注2）に触れたように「凶短折」の解釈に違いが見られる。また『洪範談』で「凶短折」（刃物の死）が「第一に重し」とされるのは、「凶

短折」の死が「死ぬる時節でもなきに死する事なり。是が死の最もおもきものなり」（『洪範談』『全集』p. 683）という理由からである。

- (注9) この「三の数」について、「談五行」では「貧」は「憂の軽き者」、「悪」は「凶短折の軽き者」、「弱」は「疾の軽き者」とされ、「貧」と「憂」、「悪」と「凶短折」、「弱」と「疾」というように、「六極」それぞれが個々で関連づけられた三つの組み合わせで「三の数」を構成している。しかし『洪範談』では「凶短折」「疾」「憂」の三者がひとまとまりとして「人の死は如此三品なり」（『洪範談』『全集』p. 683）とされ、さらに「扱、貧・悪・弱の三品は死する事なけれ共、死におとらぬくるしみなり」（同上）と「貧」「悪」「弱」の三者で「三品」を構成する。それは「不仕合を大・小とわけて、大は死三通り、小はくるしみ三通りなり」（同上）と、「六極」を「死」（大）と「くるしみ」（小）の大小二つに分け、それぞれが「三の数」を構成するということである。「六極」を「三の数」という構造で捉えるという意味では「談五行」と『洪範談』は同じであるが、その「三の数」の内実は異なっている。

【原文（三）】

然則聖人何以不曰三、而曰五乎。

曰、是合經緯之数也。雖然其实經自經、緯自緯、固不可一齊言也。唯是合、故曰五也。曰天、曰地、曰人、是各独立、語其正也。故曰經也。曰陰、曰陽、是語變也。既變也、故無中矣。天有陰陽、陰陽与天、是為三数。地有陰陽、々々与地、是為三数。所謂天地人云者、即亦其中也。事物尽有陰陽、猶色尽有濃淡也。故曰、合三經二緯、而後得五。在易則上交中爻下爻、与上体下体也。非可一列言。故曰、非自然之数也。

【書き下し（三）】

然らば則ち聖人は何を以て三と曰はずして五と曰ふか、と。

曰く、是れ経緯の数を合するなり。然りと雖も其の実は経は自ら経、緯は自ら緯にして、固より一斉に言ふべからざるなり。唯だ是れ合するのみ、故に五と曰ふなり。曰く天、曰く地、曰く人、是れ各々独立す、其の正を語るなり。故に経と曰ふなり。曰く陰、曰く陽、是れ変を語るなり。既に變ず、故に中無し。天に陰陽有り。陰陽と天と、是れ三の数なり。地に陰陽有り。陰陽と地と、是れ三の数なり。所謂天地人と云ふ者も、即ち亦た其の中なり。事物尽く陰陽有るは、猶ほ色尽く濃淡有るがごときなり。故に曰く、三経二緯を合し、而る後五を得。易に在りては則ち上交中爻下爻と上体下体となり。一列に言ふべきに非ず。故に曰く、自然の数に非ざるなりと、と。

【現代語訳(三)】

(ある者が)「そうであるならば聖人はどういう理由で三とは説かずに五と説いたのですか？」と(尋ねた)。

(青陵先生は仰った)「(五というのは)これは経と緯(注1)の数を合わせたものなのである。そうではあってもその実情は、経は自然と経、緯は自然と緯なのであって、元来(経と緯を)同等として言ってよいものではないのである。ただ合わせただけのことで、それで五と言うのである。(例えば『老子』や洪範では)天をあげ、地をあげ、人をあげるが(注2)、これらはそれぞれが他者に頼らず存在するものであり、その正(という性質)(注3)について述べたものである。そのためこれらを経というのである。(また)陰をあげ、陽をあげる(注4)。これらは(それらがもつ)変(という性質)(注5)について述べたものである。終始変であるが故に(陰と陽とで二であって)中(に該当するもの)がない。天には陰陽がある。陰陽と天とで三の数である。地には陰陽がある。陰陽と地とで三の数である。所謂天地人というものも、また(「天・陰・陽」・「地・陰・陽」・「人・陰・陽」で構成されるそれぞれの三の数の)中にあたるのである。事物全てに陰陽があるというのは、例えば全ての色には濃淡があるようなものである(注6)。だから(私は)「三つの経と二つの緯

を合わせ、その後で五（という数）が得られる」と言うのである。（この三の数の構造は）『易経』では上中下爻と上体と下体（とで三経と二緯）になっている（注7）。（上中下爻と上体下体は）同列に言うべきものではない。だから「天地自然の理による数ではない」というのである」と。

（注1） 「経」「緯」について青陵は『洪範談』で「経とは機を織る糸の堅すぢの事なり。横糸はなんぼもつぎ合さるものなれ共、縦糸は始めより終りまで一すぢつづきて通りておりて、機の紋をりんと持ておるものゆへに、大いなる条を経といふ。細きヶ条を緯といふ。緯とは横糸の事なり。人の世に居りて片時も忘れてはすまぬ言葉を、あつめてつづりたるを経といふ」（『洪範談』『全集』p. 641）と説明している。ここではこれを参考に解釈した。

（注2） 「天」「地」「人」について、『洪範談』では『老子』の天・地・人・道の四大について「一たい老子を講ずるに、四大といふ事を講ず。天・地・人・道の四つなり。是をだんだんわりつけていつてみるに、兎角数は三つなり。天・地・人の三つが動かぬかずなり。動かぬ数とは、天地自然といやといわれぬ数の事なり」「老子の四大といふは、此三つの数の外に、又一つ活きたるものを入れて四にしたるなり。たとえば天と地と人と、今一つ気といふものを入れて、天気・地気・人氣として、この気はどこへも動くものなり。天・地・人はすわりたる物なり」（『洪範談』『全集』p. 586）とする。この「天地人」が「天・地・人」といふて世界の大物三つあり。水・火・土といふも同じ事なり」（『洪範談』『全集』p. 621）と「水・火・土」と結びつけられ、洪範の「五行」が三の数であることの説明に用いられていく。青陵の五行解釈について、詳しくは前述の「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」（『国士館哲学』第十九号 平成二十七年三月）の【現代語訳（二）】を参照していただきたい。ここではこれを参考に現代語訳した。

(注3) 「正」とは青陵によれば「正は的の黒星、まんなかなり」(『洪範談』『全集』p. 643)であるが、もっと詳しく述べられているのが『老子国字解』で「正は一にして止ると書きたる字也。四方よりだんだん中へよりて、とんとよりかたまるところは、少さき星になる理也。是を正と云ふ也。的の黒星也。的をかけて弓を射るに、左右の手足、法の通りにて一分一釐もちがひなければ、矢は皆的の黒星へあたる理也。ゆへに定木の手本と云ふ事になる也」(『老子国字解』『全集』p. 924またp. 827p. 905にも同様の説明がある)と解釈されており、「定木」となるものこと。これを参考に考えると、ここでは天地人が各個独立し存在するもので、天地自然の「定木」ともいうべきものであることを述べていると考えられる。「正」が「定木」だからこそ、直後に「故曰経也」と述べられて、「正」と「経」が結びつく。また「実位が三つなり。天・地・人のよふなるものなり」(『洪範談』『全集』p. 595)と天地人を「実位」とする『洪範談』の解釈も同様の事を述べていると考えられる。ここではこれらを参考に解釈した。

(注4) 青陵の五行説においては、『老子』の四大「天・地・人・道」が、洪範の五行「水・火・土・木・金」と置き換えて説明される。例えば『前識談』には「聖人の洪範には水火木金土と云。水火土は即天地人也。金木は別に入れたるものにて陰陽と云事也」「水火土陰陽は即水火土気也。気を二つに分けて陰陽としたるものなり」(『前識談』『全集』p. 567)とある。そして五行には「五行は実は四行なり。四行も飛行のものを入れてかぞへる数なり。定数をいへば三なり。水・火・土なり。気を加へて四行とするなり。其又気を分けて陽気・陰気としたるなり」(『洪範談』『全集』p. 595)と陰陽が組み込まれる。

(注5) 「変を語る」について、『洪範談』では「曲直と従革とは変を語るなり。潤下・炎上のなかまにあらず。なぜならば、これは曲直・従革は二たいるにて、気の事なるゆへなり。潤下・炎上・稼穡はいつもあいかわらぬものなり。是を常と云ふ。曲直・

従革はとんと別なり。色々になる。切りよふにて色々になり、打ちよふにて色々になる」「曲直・従革は思惟工夫にあり。氣をつかふてこしらゆるものなり。水・火・土の部とは部がちがふなり。変化をおもにする。是生きておるものを語るなり」(『洪範談』『全集』p. 621)と、潤下・炎上・稼穡が「常」である事に対して、曲直・従革が「変化をおもにする」「生きておる」ものを語ったものであることを説いている。ただし潤下・炎上・稼穡と曲直・従革の関係や解釈について『洪範談』と「談五行」には相違がある。詳しくは前述の「海保青陵「談五行」訳注稿(1)」の【現代語訳(六)】を参照していただきたい。

- (注6) 陰陽と色の濃淡の関係について、青陵は「談五行」の前文にある「五色」の説を述べたところで詳しく説明している。それによれば青陵は色には究極に濃い「黒」と、究極に淡い「白」と、その中間の「中(各色)」の三色であると説く。また『洪範談』にも「五色といへ共紅もあり、緑もあり、碧もあり、紫もあり、いろいろありて五にあらず。それよりも極淡と極濃と中と三色にわける事よろし。今青にても、黄にても、極々うすふすれば皆白なり。極々こくすれば皆黒なり。然れば色は黒と白とより外なし。中とはてんでんのもちまへの色千百色ありてもよき事なり」(『洪範談』『全集』p. 623)と同様の説が述べられている。詳しくは前述の「海保青陵「談五行」訳注稿(1)」の【現代語訳(三)】を参照していただきたい。ここではこれを参考に解釈した。

- (注7) 『易経』の三数構造について『洪範談』では「易の分けよふも四大なり。易は四大とせず三と立る。是は定位の三つあるゆへに三と立るなり。扱、三つづつ二組立る。扱、上の三爻を上体といふなり。下の三爻を下体と立るなり。ゆへに三爻両体なり。これを五つとしたるものなり、四大にしてかんじようすれば、三爻と体なり。天・地・人と気なり」(『洪範談』『全集』p. 596)と『老子』四大と絡めて説明した上で、「やはり水・火・土を根本と立て、陰・陽をそへものと見たると同じ事なり」(『洪

範談』『全集』p. 597）と、五行も同じ構造であることを説いている。また『前識談』にも『易経』の三数構造への言及があるが、その構造は『洪範談』とは異なっている。青陵の思考の枠組みの構造の違いについて詳しくは拙稿「思考の枠組みから見た海保青陵の思想の展開」（『東洋学研究』第五十四号 平成二十九年三月）を参照していただきたい。

【原文（四）】

然則聖人何為不曰三經二緯、而曰五行乎。

曰、聖人唯曰五行、而不曰五行皆同列也。猶天地人曰三才、而地貴於人、天貴於地也。三才亦合名之々号而已。故後之語五行者、独謬矣。

【書き下し（四）】

然らば則ち何為れぞ三經二緯と曰はずして、五行と曰ふか、と。

曰く、聖人唯だ五行と曰ふのみにして、五行皆同列とは曰はざるなり。猶ほ天地人三才と曰ふも、地は人より貴く、天は地より貴きがごとし。三才も亦た合して之に名づくるの号たるのみ。故に後の五行を語る者は、独だ謬るのみ。

【現代語訳（四）】

（ある者が）「そうであるならば（聖人は）どういう理由で三とは説かずに五と説いたのですか？」と（尋ねた）。

（青陵先生は仰った）「聖人はただ「五行」と述べているだけで、「五行」（を構成する水・火・土・木・金）が全て同格であるとは述べてはいない。例えば「天地人」を「三才」と呼ぶが、（その構成要素同士である）「地」は「人」よりも貴く、「天」はその「地」よりも貴い（と「三才」の間には上下・優劣関係があつて決して同格ではない）ようなものである（注1）。（それは）「三才」もまた（天地人を）結びつけたものに名付けられた名称にすぎないからである。だから後代五行について論じた学者は、間違つた解釈をしているにすぎない（注2）。

(注1) 「天地人三才」それぞれの関係について『洪範談』では「天・地・人といふは天は第一に大なるもの、その次は地、其の次は人なれ共、その功は同格なり」（『洪範談』『全集』p. 621）と、天地人の順がありながらも「功は同格」とする。「功」とは「木は天の雨露と、地の気とにて大きくなる。其木を器用に作るは人なり。ゆへに天作と人作とはひつぱりたるものなり。木をこしらへるは天地なり。器をこしらゆるは人なり」（同上）、また「地は木を植ゆるもの也。天は日をあて雨露をふらせ、風を吹かせて木を養ふもの也。故に木をこしらゆるは天地也。人は天のする事も、地のする事も出来ぬ共、其出来たる木を舟に作り車に作るは人也。是は又天地は人のする事は出来ぬと云もの也」（『前識談』『全集』p. 565）と、天地がモノを生み出すのに対して、人はモノを生み出すことは出来ないが、モノを変化させて価値を生み出すことが出来ることを指す。

(注2) 青陵は後代の学者について辛辣な評価を下している。例えば「古の書を読む人は、書に天地間の万物の情が載せて述べてあるゆへに、これ知をろふとて書を読む事なるに、後世の支邦文字学になりては、事物の情を探ることなきゆへに、何の役にもたため事に骨を折りて、丁寧を読まねばならぬものをば却てぬかして読まぬ事あり」（『洪範談』『全集』p. 585-586原文ママ）など。しかしその「後の五行を語る者」は、建前上「後世の支邦文字学」者に限定されていることになっている。「篇中に後儒とかきたる事多くあり。此は支邦の漢以下今の清朝までの人のおわさなり。吾邦の歴代の大儒、当今の碩師先生の事にてはなきなり。鶴は儒者の家に生れたるものなれば、吾邦の古への書など見たる事なし。ゆへに歴代の衣冠の大儒先生などの事は御姓名さへ知らぬなり」（『洪範談』『全集』p. 584）と青陵は予防線をはっている。

(以下続稿)